地質・地形が育む三田の歴史・文化

市史の第８巻考古編によれば、市内でおよそ600基の古墳の存在が確認されています。これらの多くは、６世紀から７世紀にかけて一定の範囲に小規模な古墳がたくさん築かれた群集墳と呼ばれます。これらの群集墳には、棺(ひつぎ)が石組みの石室に納められるか、墳丘に直接土葬(直葬)するかが群ごとに分かれる傾向があります。特に多くの群集墳が分布する広野地区では、武庫川の右岸(南)がウッディタウン中央公園に保存されている古墳のように直葬であるのに対し、左岸(北)では群により石室または直葬に分かれます。

これは群集墳が築かれた周辺の地質や地形の違いによるものと推測されます。武庫川右岸は、ほぼ全体が湖によって形成された比較的平坦な丘陵(段丘)で、石材は見当たりません。それに対して左岸では、段丘の背後に古い有馬層群の岩盤が露出しており石材が容易に確保できるのです。このことから古墳時代の人々は、石材が入手可能ならば埋葬には石室を用いる傾向があったこともうかがわれます。

また群集墳が築かれるのとほぼ同じ頃から、現在の青野ダム周辺では須恵器(すえき)と呼ばれる焼物の生産が始まります。末と言う地名の起りでもあります。これ以降、三田盆地は、昭和の戦前の三田焼に至るまで、およそ1,300年以上もの間、各時代の先端技術を導入した焼物の産地でした。焼物生産を支えたのも地質と地形です。末や藍地区の須恵器生産、それに江戸時代の藍地区で大量に生産されたすり鉢は、いずれも三田盆地が静かな湖であった頃につもった良質の粘土を選んで原料とし、段丘の斜面に築いた窯で焼かれました。また三輪地区で生産された三田焼は、有馬層群から探した原石を用い、段丘斜面の窯で生産されました。

はるか昔に三田盆地を形作った地質や地形が、祖先の営みと三田の特徴ある歴史・文化を育んだのです。

生涯学習支援課 市史編さん担当